

パチットモンスター、略してパチモン！ この世界にはたくさんのパチモンがいて、彼らを手に入れては戦わせて、冒険をする少年少女で溢れている。

そして私はパチモントレーナーのコトナ。

青いサロペットに赤いトップスを着た、駆け出しの新米冒険者だ。世界一のパチモンマスターになるために、いろんな街にあるパチモンジムを巡って修行してるんだ！

なのに……。

「や、やめてください！」

この世界ではパチモンを使ったバトルで負けると、ひどい目にあう。

タマタマシティにあるジム、そのボスとの勝負で負けた私は手足をツタに縛られていた。

「お金なら出しますから、離してください！」

「あらあら、『女の子は戦って負けたら犯される』がパチモンバトルのルールでしょ？」

そう言うのはボブカットの黒髪に、黄色い着物に赤の袴を着た女性。

そのお嬢様然とした佇まいの彼女の名はユリカ。バトルの最中は表情を変えずにおしとやかだったのに、今は表情を朱に染めて熱を帯びていた。

「女同士で別にしたくないなら、しなくていいってルールじゃないですか！」

「あのね、敗者は奪われるものなのよ。それにこうして悶え苦しむ姿を見るのも、勝者の特権なの」

うっとりとした表情で言う彼女。

そこで手足に巻き付いていたツルが私の体を大の字に広げた。足を無理やり割られて、手も動かそうにも強い力で動かせない。

「た、助けてえ！」

「ほらほら、いい感じよ」

ツタはまるで蛇のように体に這わせてくると、服の中へと侵入を始めた。サロペットの裾に加えて、トップスの袖からゆっくりとツタの先端を体の奥へと伸ばしてくる。上下の下着にたどり着くと、ちろちろと蛇の舌のように舐め始めた。

「やっ、やめて！」

上半身だけでも体に力を入れるけど、ツタは離れてくれない。

ブラジャーを上からゆっくりと触り、カップをこじ開けて乳首を触り始めた。その瞬間、

まるで電流が流れたようにビクンと体が反応してしまう。

「い、いや、離してえ。やあ、ああん」

くりくりと優しく触れられる度に吐息が漏れた。

両方の乳首を締め付けられると、痛さよりも快感が先に来る。というか、なんでこのツタこんなにテクニシャンなの！？

「あっ、ふぁ、ち、乳首が……っ」

「あらあら、はしたないわね。それじゃあ、こっちはどう？」

「やっ！」

ツタが私の股間をパンツの上から撫でさすった。

少しでも太もみを閉じたいけど、ツタは容赦なく強引に股を開かせてくる。さらには堂々とクロッチの中央をなぞってくるのだ。

「ああっ、も、もう許して」

何だ、この感覚。手足を拘束されてるせいか、余計に感じちゃいけない衝動がアソコから込み上げてくる。

「やめてえ、あっ、あっ、あっ！」

私の割れ目で綱引きでもするように、何度も何度もこすりつけてきた。気持ちよさに耐えかねてクリトリスが勃起してくると、今度はそこ目掛けて重点的にいじり出してくる。

「ひゅん！」

乳首よりも股間の方が熱い。それどころか、あたたかな何かが沁み出してきてる。じわあって広がってるのがわかるのに、自分じゃ止められない！

「み、見ないでえ！！ い、い、イきそうっ！」

衝動に体が弓なりに反れた。そのまま、元の姿勢に戻ると股から溢れた液体が太ももの方まで、じんわりと広がった。

「あらあら、まだ服の上からなのにもうイっちゃったの？」

「うううう……」